

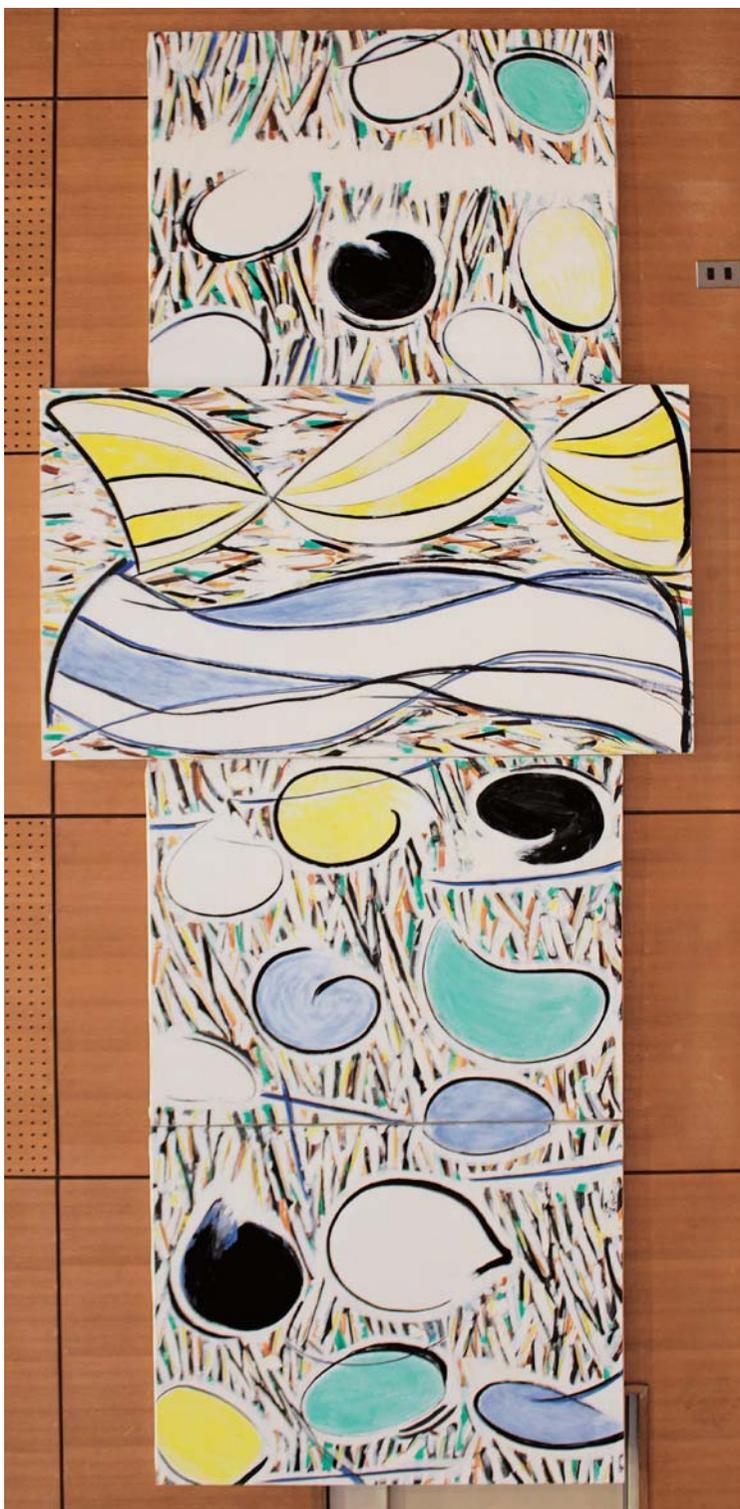


作品制作 2011年夏

美術学部 原田 久 *Q. Harada*



天、地、人
Cosmos, Earth, Men
アクリル絵具、パネル Acrylic Pigment, Panel
260x388cm 2011



天、地、人
Cosmos, Earth, Men
アクリル絵具、パネル Acrylic Pigment, Panel
117x360cm 2011

レアリティの復活

芸術の分野において原始時代から今日までその主幹をずっと成しているのは真理、レアリティの追求である。原始時代の頃は物を造るとそれが自然とレアリティ(真理)のある、レアリティを内包する物になってしまった様である。世界のあらゆる地域において発掘された物は共通にレアリティを内包している。

また時を経てマサッチョ、敦煌の壁画、ダビンチ、フェルメール、エル・グレコ、俄屋総達、芭蕉、円空、王羲之、空海、マーク・ロスコ、音楽においてはモーツァルト。大ざっぱ過ぎるがレアリティのある芸術は過去においては数多い。では現代はどうか？残念ながら非常に少ないと言わざるを得ない。しかも芸術作品にはレアリティが内包していると言う事すら気がついてない様だ。

その原因は何か？感覚が鈍くなったからである。芸術の分野において感覚が鋭いという事は第一の条件である。何に対して鋭くなければならぬか。レアリティに対して。

ではレアリティとは何か？ 全宇宙に響き渡っている波動の事と思っっている。この一握りの空気の中にもそれは存在している。とてつもなく凄いいエネルギー。とてつもなく深い慈愛。とてつもなく高貴。その様なヴァイブレーションがこの空間には充滿している。昔の人々は自然に波動を感じていた様だ。何故我々はこの波動を感じ、体智出来ないのか。それは主に現在の教育システムにある。生まれてから5、6才の頃まではその波動を体智している様である。原始時代の人々、子供達の感性は柔らかく鋭い。それから知的障害者と言われる人々。彼らの作品を見ると素晴らしくその波動と共鳴している。その原因は右脳が生き活きと動いているからである。右脳は主に直感力や創造性を司っている。左脳は論理性や言語能力の働きを司っている。左脳のあまり働かない人々を知的障害者と言っている。それでは右脳のあまり働かない我々には感的障害者ではないのか？ 幼い頃から右脳も使い続けると言う事は大切な事である。

モーツァルトやエジソン等はその代表的な人である。音楽の分野でも2、3才の頃からずーっと大人になるまでピアノやヴァイオリンを弾き続けると言うのも右脳が働き続けるからであろう。続けると言う事は大切な事である。学校教育を受けながらも(つまり左脳を働かす)、家に帰ると音楽のレッスンを毎日する(右脳を働かす)。この様にすると両脳が大人になるまで働き続ける。

最近アメリカで賞を頂いて、今話題の盲目のピアノスト辻井伸行氏は3才の頃から毎日8時間程ピアノを弾いていたそうである。成人になっても右脳が素晴らしく働いている実例である。ちなみに脳の基底部には音楽野とか美術野とか専門分野を司る部位がある。これは常に使い続けなければならぬ音楽や美術を体智できぬ仕組になっていて。音楽や美術に興味を持ち鑑賞するが、その作品の持っている内容を味わえる様になるには長い時間が必要になる理由である。また鑑賞できるのは自分の持っている感性のレベルまでである。前述のレアリティのある作品群、例えばレオナルド・ダヴィンチのモナリザ、この作品を理解し味わうにはダヴィンチと同じ感性を持っていないければならぬのは当然の事である。モーツァルトの作品も然り。

鑑賞したからと言って全て味わえた訳で無い。芸術作品を造る、演奏する場合も同じで例えば芸術大学へ入学し四年程制作、演奏するがそのレアリティの質の価値は学生の時に大体決まっている。つまり一生を通じて制作、演奏するがレアリティがあるかどうかの目で見れば、その価値は一生同じか、だんだん下がって来ると言う事である。いろいろな作品の形を変えたり、演奏の形を変えたりして技術的に上手くはなっているが良くなるはなっていないのである。ほとんどの芸術家が形を変えて上手くなっていくと、自分の作品は良くなっていると錯覚し

がちである。

その原因は右脳の働きが学生の頃とほとんど同じレベルで止まっているからである。何故か毎日努力し絵を描いても右脳の働きは学生の頃のままである。ここで必要になってくるのが感性を鋭くし、右脳の働きをよくする教育である。自分の作品に対してレアリテイがあるかどうかという問いは大切な事である。見えない所に一番大事なレアリテイがある。まずいろいろな作品を見る(聞く)時、形や色、線のリズムを見て(音階やハーモニーを聞いて)全体を把握する。「ああ美しい」「うまいなあ」「味わった」それで終りでない。見えない事、見えない所(聞こえない所)にこの作品はレアリテイがあるかと言う問いである。前述もしたが、その作品が自分のレアリテイを感ずる感性よりはるかに素晴らしいレアリテイを見ている。その作品を見る人のレアリテイを見る感性能力が「3」しかないと残りの「7」は理解できず味わえない事になる。この事は多くの人々が見過ぎていて気がつかないでいる。専門分野の感性に自信を持っているから全て味わえたいと思いがちである。現在の教育は6才の頃から学校に行き、左脳教育(論理的、言語能力)を受ける。小、中、高と12年間、さらに大学へ行くと16年間、ほとんど左脳しか使わない教育をされている。また右脳を使う美術や音楽は全く軽視されている。

発明、発見、個性的な芸術の創造には右脳の働きが必要不可欠である。右脳の直感的なひらめきを左脳の論理性で整理して物を造る。芸術の基礎は感覚を磨く事である。料理人は毎日包丁を研ぐ、切れ味が鋭くなければ旨い刺身は造れない。感覚も毎日磨かなければ錆びてしまう。右脳、左脳はもちろん全体全体の感性を毎日磨く事。

脳の中でも左脳と右脳の間にある松果体を目覚めさせる事は大切な事である。何しろ6才の頃から20年間程全然存在すら考えた事のない部位であるから。古今東西、特にアジアや古くから伝統を守っている民族。インデアン、アボリジニ、アイヌの人々、他。自然と共に生活している人々は松果体がよく動いている。日本で言う禅、神道、密教、道教、武道、その他松果体を覚醒させる行のシステムがある。人間の体には「チャクラ」と言う感性のツボがある。それは人体を解剖しても無い。感性を良くするにはチャクラの覚醒は重要な事である。覚醒させる為に必要なのは「気」である。昔からの言葉で「気がつく」と言うのがある。昔の人々は知っていたのである。

気が体に付いていないから気がつかない。

気が体に付ければ気がつく。そして右脳も動き出す。

人間の体は肉体とエネルギー(気)で出来ている。是非気がついて欲しいものである。

最近の私の作品は「からみ」を指している。

私もそろそろ先が見えて来て人生のラストは「からみ」を狙うと決めてしまいましたので……。からみとはかそみ。空。無。宇宙との共鳴などむずかしくみたく思っています。レアリテイの明るさ、深さ、貴さは無限である。到底人間の理解できるところではない。しかしそれに対して無限に追求できると言う事でもある。

それでは気をつけてね。バイバイ。



1998 冬 流行

原田 久

1946 茨城県生まれ
 1970 愛知県立芸術大学美術学部油画卒業
 1972 愛知県立芸術大学大学院油画終了
 現在 名古屋芸術大学美術学部美術学科

■個展

- 1972 桜画廊/名古屋
- 1973 橋近代画廊/東京
- 1975 キャラリーデコール/東京
- 1980 ヴィーナ画廊/名古屋
- 1982 「AU82展」東京都美術館/東京
- 1983 キャラリー白善、キャラリーU、ウエストバスキャラリー/名古屋
- 1984 スペース10スペース、ラブコレクションキャラリー/名古屋
- 1985 ラブコレクションキャラリー/名古屋
- 1986 ザ・アートワト/ハワイ
- 1987 ラブコレクションキャラリー/名古屋
- 1988 クラインキャラリー/シカゴ
- 1989 ラブコレクションキャラリー/名古屋
- 1991 ラブコレクションキャラリー、キャラリー竹内/名古屋
東京アートエキスポ/東京
- 1992 織部亭/一宮
キャラリーニュークワンスト/スイス
キャラリースクイズ/オーストラリア
- 1993 さいとう画廊/名古屋
ヒボススイス/チュエーリッヒ、スイス
ラブコレクションキャラリー/名古屋
- 1994 キャラリーオー/一宮
- 1997 「一握りの空気の意味を求めて」ミズマアートギャラリー/東京
キャラリー達磨/名古屋
- 1998 さいとう画廊/名古屋
- 1999 キャラリー141/名古屋
- 2000 日動画廊/名古屋
- 2001 キャラリーアバ/名古屋
- 2002 キャラリー141/名古屋
- 2006 中央美術学院美術館/中国
- 2007 福建省画院/中国
中央民族大学美術館/中国
- 2008 九立方美術館/中国
- 2010 原田久の公開制作、あいちりエンターテインメントナーシップ参加
/名古屋芸大体育館
伊勢現代美術館/三重
- 2011 Gallery Amano/山梨

■グループ展 (1980以降)

- 1980 「わどろ展」みゆき画廊/東京
- 1981 「わどろ展」みゆき画廊/東京
「四脱展」名鉄丸栄/一宮
- 1982 「81 西武美術館版画大賞展」西武美術館/東京
「14 回日本国際美術展」東京都美術館、京都市美術館
「Hight SENSU 展」仙台、名古屋、広島、大阪、宮崎
- 1983 「現代芸術 AU'83」/東京都美術館
「北関東美術館」/栃木県立美術館
「全瀬戸内アートフェスティバル」/福山
「AU カナダ展」/バンクーバー
- 1984 「現代芸術 AU'84」/東京都美術館
「現代芸術大阪 84 展」/大阪府立現代美術センター
- 1985 「現代芸術 AU'85」/東京都美術館
「IMAGE & CONCEPT」/スフォート/大阪
「方の会」/名古屋博物館
「四脱展」/一宮名鉄
- 1986 「SPACE TO SPACE'85」スペース to スペース/名古屋
「CROSSINGS86 日本ノワイ現代美術交流展」ABC キャラリー
/大阪西武シードホール/東京
「現代美術展」/金沢
- 1987 「コンストラクツ展」/アニタ・ジャロスキギャラリー/ N.Y.
「6 人の日本現代アートメーカー」ロングビーチ・コンテンポラリー・ガレージ
/ロサンゼルス
「現代美術のコスモロジー展」I.C.A. 名古屋
「町と邑の展覧会」/倉敷
- 1988 「シカゴ国際アートフェア」/シカゴ
「現代抽象絵画と彫刻展」クライン・ギャラリー/シカゴ
- 1989 「名古屋アートフェア」名古屋電気文化会館
「名古屋芸術賞受賞作家展」名古屋市民ギャラリー
- 1991 「東山荘現代美術展」/名古屋
「東海の作家たち」愛知文化センター
- 1992 「はじめて美ありき展」ぎやらりー EMORI /東京、第一画廊
/名古屋
- 1994 「はじめて美ありき展」ぎやらりー EMORI /東京、第一画廊
/名古屋
- 1995 「愛知県立芸術大学 30 周年記念展」/愛知県美術館
「NICAF コンテンポラリーアートフェア」バシレイコ横浜
- 1996 「美の予感」高島屋/東京、大阪、京都、横浜
「はじめて美ありき展」第一画廊/名古屋
「トビカ/日本の現代美術が1100年のハンガリーに挨拶する」
ユネスコ・ゴム王宮美術館/ハンガリー
- 2001 名古屋アートフェア/名古屋
- 2008 北京オリンピックビジュアル/中国